桔梗野小

関わり合い、考えを深め、解決する子の育成

～主体的に学び合う活動の工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　吉田　朝子

１　研究主題について

⑴　教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標に「思いやりのある子」「進んで学習する子」「進んで体をきたえる子」の徳、知、体の柱を掲げ、「自ら学び、よく考え、進んで表現する子」の育成を目指している。この目標の具現化のためには、主体的に学習に取り組み、お互いの学び合いの中から思考を深め、課題解決に向かうことが重要であると考えた。

⑵　研究の経過から

昨年度まで、「言葉を身に付け、豊かに表現する子供の育成～主体的・対話的で深い学びを目指して～」という研究主題で取り組んできた。発問を吟味したり考えさせる場面を多く作ったりすることにより、主体的に学び、自分の考えを表現できる児童が増えてきた。さらに、教師から一問一答ではない揺さぶりや問い返しの発問をすることで、児童が必要感をもって学習に取り組むようになった。そして、課題解決に向かうことが対話的活動につながり、学び合いでの効果的な思考の展開を可能にした。自分の意見が確立することで、考えを発信することに自信をもち、円滑なコミュニケーションと主体性の向上につながった。

このように、児童のコミュニケーション力や主体性の向上についての成果が見られたものの、学び合いの工夫により自分の考えを深め、課題解決に生かすところまでは及ばなかった。

そこで、研究主題「関わり合い、考えを深め、解決する子の育成」を掲げ、深い学びとして目指す姿を共有しながら課題の解決に迫りたい。今年度は３年計画の１年次として、児童が関わり合いの中から自分の考えを深め、主体的に学び合う効果的な指導について研究を進める。関わり合いの中から生まれた「問い」を学習課題につなげることで、思考の枠が広がり、お互いの意見を交流させながら課題解決力を向上させられるのではないかと考える。

昨年度までの研究成果を生かしつつ、自力解決や集団解決に見通しをもつための手立てや関わり合いの場面作りを工夫することで共通意識を高めさせ、目指す児童像に迫っていきたい。

２　研究のねらい

関わり合いの中から、考えを広げたり深めたりして、主体的に学ぶ児童を育てるための指導の在り方について算数科を中心とした授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

教師の働きかけや発問を工夫して、関わり合いの中から考えを深める授業を日常化することにより、主体的に問題解決に向かおうとする児童を育成することができる。

４　研究内容

⑴　算数科における、主体的に問題解決に向かう指導の在り方。

ア　導入場面で、問いをもたせる課題（問題）提示の工夫。

イ　問題解決へ向かうための対話的活動の工夫。

⑵　学びのわざの継続による主体的に学ぼうとする態度の育成。

⑶　学習用語の掲示など、学びの手がかりの活用や工夫。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者等
６	３０	第１回授業研究　　３年２組　算数「表とグラフ」 授業者　教諭　長谷山　有也
９	２９	第２回授業研究（要請訪問）　４年２組　算数「面積」 授業者　教諭　直井　万里　　助言者：戸耒　友拓　主任指導主事

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２８	特別な配慮を要する児童の理解　　担当：本校教諭　富岡　明美
５	２６	「問題解決的な授業づくり」の研修　　講師：松橋　祐哉　主任指導主事
６	９	「食物アレルギーの緊急時の対応について」　担当：本校養護教諭　井上　佳林
６	１６	「１人１台端末の活用」の研修　　講師：石井一二三　主任指導主事
８	２５	県学習状況調査の分析・考察
９	８	「ネットいじめ」情報モラル研修　　担当：本校教諭　小堀　祐二
１１	１６	Q－U に関する研修　　講師　西白山台小学校　原　寿　校長先生
１	１２	研修報告　算数科～児童が話したくなるしかけを通して～
２	９	総合的な学習の時間報告会　（各学年より）

６　研究の成果

(1) 身近で興味がわく問題の提示や ICT の活用により、児童が自分のこととして課題を捉え、必要感をもって主体的に問題解決に向かうことができた。対話的活動では、個の考えをもたせてから対話を進めることで目的意識が明確になり、活発な話合いにつながった。

(2) 自主学習ノートや家庭学習の約束を定着させることで、その日の学びを自分の言葉で表す力が育った。振り返りを継続して書くことにより、大切なキーワードを入れたり既習事項と関連させたりしてより深い思考ができるようになった。既習事項のアウトプットが可能になり、問題解決能力が向上した。

(3) 既習事項や振り返りを生かした掲示を工夫して、全校で学習環境を整えることで、児童にとって既習内容の確認や問題解決の手がかりとして活用することができた。また、学習活動を進める際の共通のキーワードとして認識して、個々の発表や振り返り、自主学習などに取り入れる児童が増える等、学びの広がりが見られた。

７　研究の課題

(1) 課題から問いをもてたかどうか全員の把握が難しく、さらに、独自の解き方にこだわる児童もいるため、思考の共有や整理、転換、再構築等を促す働きかけを考えていかなければならない。対話的活動をより深めるために、今後は発問の工夫や揺さぶりを計画していきたい。なお、習熟度別クラスによる授業においては、クラスごとの到達点を各授業者が共通認識して、見取りや評価を行う必要がある。

(2) 学びのわざを定着させるために、全学年で取り組める内容を検討する必要がある。授業の振り返りの場面や方法、提示について共通理解し、学びのわざを充実させていく必要がある。

(3) 学習用語や言葉を正しく使い、自分の考えをまとめたり発信したりする機会を意図的に設定していく必要がある。たくさんの掲示物があることで集中できない児童もいるため、精選して学びの環境を整えていく必要がある。

（記入者　田島　結希子）